

学会発表渡航支援報告書

|  |   |                              |
|--|---|------------------------------|
| (ふりがな)<br>氏 名  | さかなし けんた  | 所属・職名                        |
|  | 坂梨 健太   | 京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻・博士後期課程 |
| e-mail   | mokkosu81@gmail.com   |                              |
| 発表題名<br>(英語)   | Hunting by the Baka hunter-gatherers during the cacao harvesting seasons in southern Cameroon |                              |
| 著者名  | Kenta SAKANASHI   |                              |
| 会議名<br>(英語)  | International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers                                      |                              |
| 開催地(国、市)   | Montpellier, France   |                              |
| 参加期間   | 2010年6月22日 ~ 6月24日  |                              |
| <p>1978年から定期的に開催されてきた狩猟採集社会会議（CHAGS: Conference on Hunting and Gathering Societies）が2000年初頭で諸事情により停止状態になってしまい、一部の有志の方々が再度、地域を限定して復活させたものが本会議、コンゴ盆地狩猟採集民会議（ICCBH: International Conference on Congo Basin Hunter-Gatherers）である。参加国は、フランス、イギリス、アメリカをはじめとする欧米諸国、そして日本、アフリカからは、カメルーンや中央アフリカ共和国からの研究者など総勢80人ほどが参加した。銀行口座を持たないためにフランス滞在ヴィザがおりず、一部のアフリカ人研究者が出席できなかったことが残念であった。</p> <p>今回はコンゴ盆地という地域が限定されていたこともあり、一つの大会場のみでおこなわれたため、活発な議論が展開された。全日程、最後のセッションにはオープンディスカッションが生まれ、一つのテーマについて参加者全員で議論する形態を取っており刺激的だった。テーマは「誰がピグミーか?」「ブッシュミート取引」など、コンゴ盆地に暮らす狩猟採集民に関わる研究者にとって非常に重要な問題である。ただし、この会議には狩猟採集民と呼ばれている人びとは参加していなかった。カメルーン在住の農耕民と狩猟採集民のハーフの活動家が参加する予定だったが、やはり上記の理由で出国できなかった。彼らがいなくて彼らの権利を議論していたわけだが、そのことについてはあまり触れられなかったようである。</p> <p>私は、「開発と保全問題 2」というセッションで農耕民が狩猟採集民に依頼する狩猟の報告をおこなった。私自身の研究対象はカメルーンの熱帯雨林に暮らす農耕民であるが、同じ地域に暮らす狩猟採集民との関係を見過ごすことはできない。本来、農耕民も狩猟採集民もそれぞれ狩猟をおこなってきたのだが、これまで別個に研究されてきた。しかし、現実には農耕民が狩猟採集民に依頼することが多く、両者の関係性の中でおこなわれる狩猟について現地調査に基づいて詳細に論じた。このような狩猟は農耕民の経済状況、カカオ生産、人間関係などの影</p> |   |                              |

学会発表渡航支援報告書

響を受けているのである。オープンディスカッションのひとつのテーマに挙げられたように、ブッシュミート取引は野生動物の減少を招くとして深刻な問題となっており、地域住民の狩猟に対する規制も強化されている。しかし、個人や同じ民族の狩猟活動と野生動物の減少という狭い枠組みに限定するのではなく、地域の人間関係や経済状況、都市とのつながりなどを考慮に入れる重要性を述べた。

質疑応答では、私の報告が主に農耕民側の視点から述べられていて、実際に狩猟採集民は農耕民の狩猟依頼をどう捉えているのかという質問やブッシュミートの流通や販売に力点が置かれ、消費についてはどうかという質問が寄せられた。これらに対して、これまで論文にしてきた事例や最近の調査内容から応答した。

報告以外で刺激を受けたのは、今年二月にアメリカの学会で知り合った同年代の研究者たちと再開できたことである。このような楽しみも国際会議・学会の魅力であろう。

